中学生における愛着スタイルと対人的疎外感の関連

The Relation of Attachment Style and Interpersonal Alienation in Junior High School Students

永田有香[1] Yuka NAGATA

緒賀郷志 (岐阜大学教育学部) Satoshi OGA

要約

本研究では，中学２・３年生476名について，内的作業モデルから形成される４つの愛着スタイルと対人的疎外感の関連を，心理的距離の視点をふまえ検討した。愛着スタイルの割合は，とらわれ型，安定型，拒絶型，恐れ型の順に多く，大学生を対象とした研究とは異なる構造となった。学年差や性差が見られたため，学年と男女別の4群に分類して分析を行った結果，自己観や他者観のいずれかがネガティブな愛着スタイル，２年生では特に，自己観がネガティブな愛着スタイルが，自己観や他者観がともにポジティブな安定型よりも対人的疎外感が強かった。また，心理的距離が遠い者のほうが近い者よりも対人的疎外感が強かったが，男女別では，男子では自己観が，女子では現在の友人との心理的距離が対人的疎外感に強い影響を与えていた。

キーワード：愛着スタイル (attachment style)　内的作業モデル (internal working model)
中学生 (junior high school students)　対人的疎外感 (interpersonal alienation)

問題と目的

アタッチメント理論では，乳幼児期に形成された愛着は次第に内在化され，乳幼児期には物理的近接関係を確立•維持することによってしか得られなかった安心感を，現実の近接に頼らなくとも，主要な他者との関係に関するある種のイメージや確信を通して得ることができるようになるとされている (遠藤, 1998, p54) 。自己の中に作り上げるこうしたイメージや確信は，愛着における「表象モデル (representational model)」あるいは「内的作業モデル (Internal Working Model：以下IWMと示す)」と呼ばれている(遠藤, 1998, p54)。そして，乳幼児期からの愛着対象との様々な出来事や経験を通して形成されたIWMは，愛着対象以外の他者へと般化されていく。粕谷•菅原 (2001) は，詫摩・戸田 (1988) の内的作業モデル尺度を用いて，中学生のIWMと学校適応との関連を研究し，secure因子が優勢であると，集団内での承認を認知し，適応感を持ち，ambivalent因子が優勢であると，集団の中で冷ややかにされると感じ，不適応感を持つことを示した。すなわち対人関係研究上においてIWMは重要な要因の一つといえよう。

IWMとは，自己と他者の有効性に関する主観的な表象 (Bowlby, 1973/1977; 丹羽, 2002) であり，Bartholomew & Horowitz (1991) は，自己や他者への確信がポジティブであるかネガティブであるかによって成人の愛着スタイルを分類する新しい枠組み，２次元４分類モデルを提案し，その尺度として，関係尺度 (Relationship Questionnaire) を開発した。そして，加藤 (1998) は，このRQが２次元４分類の愛着スタイル尺度として，十分に使用可能な，妥当性のある尺度であるとみなすことができるとし，日本語版RQを作成した。この尺度では，自己観と他者観がともにポジティブである場合は「安定型」，自己観がポジティブ，他者観がネガティブな場合は「拒絶型」，自己観がネガティブ，他者観がポジティブな場合は「とらわれ型」，自己観と他者観がともにネガティブな場合は「恐れ型」とされる。

加藤 (1998) によると，この2次元4分類モデルにおける自己観は，「自尊感情の維持を他者からの受容に依存する程度」と考えられ，依存性が低いほど自己観はポジティブであり，依存性

1）岐阜大学教育学部平成21年度卒業生

が高いほど自己観はネガティブであるとされる。一方，他者観は「親密さの回避」の次元と考えられており，親密性を回避するほど他者観はネガティブに，回避しないほど他者観はポジティブになるとされている。さらに，中尾・加藤(2003) は，成人愛着研究では4カテゴリー愛着スタイル尺度を用いることが現段階で最も適切であるとしている。

ところで，思春期に位置する中学生は，「他者との関係を模索」(石隈，1998，p.182)し，「自我が親の自我からの自律性を獲得」(保坂，1998，p.106) する課題を持ち，「親に向けられていた愛着が次第に自分自身に置き換わっていく自己意識が高まる時期」(神谷，1997，p.79) である。そのため，他者の目に映る自分を非常に気にかけるとともに，つくり上げる自己像がとてももろく，危うい不安定なものであるとされている(神谷，1997，p.79)。実際，Coleman (1980，岡田 (1992) 引用による)は，「多くの研究に共通する結論として，14歳から16歳の年代において，友人関係に対する不安がもっとも強く，また男子に比べ女子の方が，相手からの拒絶や否定的評価を恐れる傾向が強い」と述べた。

これらのことをふまえると，思春期に位置する中学生では，他者との関係に強い不安を抱くことで他者との間に距離感や違和感が生じ，対人的疎外感を感じることが多々あると考えられる。

疎外感に関しては，杉浦 (2000) が，宮下・小林 (1981) の定義を受けて，疎外感の中でも「本当の自分を理解されていない感じ」「お互いに分かり合えておらず，距離がある感じ」といった否定的感情を，社会や周囲の人との関係で生じる疎外感と捉え，それを対人的疎外感 (interpersonal alienation) と定義した。また，坂本・高橋 (2006) は，心理的距離という視点から疎外感と友人関係の関連を研究し，「もっと近付きたいけれど近づけていない」と感じている青年ほど疎外感を強く感じていることを明らかにした。

さて，Bowlby (1973/1977) の理論では，愛着対象に対する作業モデルと自己に対する作業モデルは相互に補い，そして強めるように発達すると考えられている。このことからは，他者への確信だけではなく，自己に対する確信もまた対人関係に影響を与え，疎外感の強さを左右するだろう。

1. 恐れ型の特徴と対人的疎外感

恐れ型は，他者に拒絶されるという予測と結びついた強い対人不信感を経験していると考えられている (Collins et al. 2004/2008，p187)。この経験は，他者は自己を受け入れてくれない拒否的な存在であるという他者への確信につながる。加えて，恐れ型は，自尊感情の維持を外的な受容に依存し，自己に価値を与えうる他者からの受容も確信できていない状態にあると考えられるため，自己の意思に沿った積極的なコミュニケーションが行えず，他者との間に大きな距離感を感じるであろう。そして本当の自分を理解されていないと感じるために，強い対人的疎外感が生じると考えられる。そのため，他者や自己をポジティブにとらえる他の愛着スタイルと比較すると，最も対人的疎外感が強くなると予測される。

2. とらわれ型の特徴と対人的疎外感

とらわれ型は，他者との親密な関係に過剰にのめり込むとともに，その関係を理想化し，自分の幸福感を他者の受容に依存するとされている (加藤，1998)。そのため，自己の抱く希望が叶い，他者との関係がより親密になった状態では，他者との間に距離感を感じながらも，本当の自分を理解されていないと感じることは少ないだろう。しかし，自己の抱く理想は，すべて実現するわけではない。自己の抱く希望が叶わず，他者との関係に距離が生じた状態になった場合，これまで抱いてきた希望に満ちた他者に対する認知が全てネガティブに変化すると考えられる。このような自尊感情の維持を外的な受容に依存するとらわれ型では，その不安定さから，自己観，他者観ともにネガティブな恐れ型に次いで対人的疎外感が強いであろう。そして，とらわれ型の中でも，友人との心理的距離が遠い者のほうが，心理的距離が近い者よりも対人的疎外感が強いと予測される。

3. 拒絶型の特徴と対人的疎外感

自己観がポジティブ，他者観がネガティブな拒絶型は，自分自身のみで自尊感情を維持していると考えられる。また「自分に自信があり

(Collins et al. 2004/2008, p187)」，他者との親密な関係の重要性を過小評価し，独立性と自立性を重視しているとされる (加藤, 1998)。そこで，他者との間に距離が生じたとしても，その出来事をネガティブに捉えることは少ないと考えられ，対人的疎外感につながる否定的な感情が生じにくいであろう。一方，他者観がネガティブであることは，他者は信頼できず，受容してくれないという潜在的な拒絶を感じているとも考えられる。この感情は，対人的疎外感を強める要因となり得るため，対人的疎外感は生じにくいものの，対人的疎外感をある程度は感じるであろう。

4. 安定型の特徴と対人的疎外感

自己観，他者観がともにポジティブな安定型は，他者からの受容を確信し，自己は愛情を受ける価値のある人間であると捉えている (Collins et al. 2004/2008, p187)。また，他者を信頼し，率直なコミュニケーションによって，他者と親密な関係を構築しようとする (Pietromonaco et al. 2004/2008, p244)。ゆえに，他者に距離感を感じ，本当の自分を理解されていないと感じることは少ないだろう。また，他者との親密な関係を築く場合だけではなく，一人で行動するような場合においても，自尊感情を自分自身で維持できるため，他者との関係における違和感は小さいだろうし，その状況で本当の自分を出せないことも生じにくいと考えられる。この安定型は対人的疎外感が最も弱いと予測される。

5. 幼少期の愛着と対人的疎外感

佐藤 (1993) は，回想法による過去から現在に至るまでの愛着の表象を愛着歴として重要視し，中学生，高校生，大学生を対象に，その愛着歴と対人的構えの関連についての研究を行い，中学生段階では親や親以外の対象に対する愛着が一般的対人態度に対して似たような意味を持ち，どちらか一方でも良好であることが，対人的構えの良好さへと繋がっていくとした。また酒井 (2001) は，大学生を対象にした研究で，就学前の母子関係が安定していると，現在の愛着関係における自己信頼感や相手への信頼感が強められる傾向にあることを示した。これらのことから，中学生の対人的疎外感を検討する際には，現在の愛着だけではなく，幼少期の親への愛着も同時に考えていく必要があるだろう。

本研究では，親友との心理的距離および幼少期の親への愛着も含め，先に述べてきた愛着スタイルと対人的疎外感との関連を検討することを目的とする。

方法

調査協力者：東海地方の公立中学校（1校）に通う2～3年生の15学級526名であった。内訳は，2年生が234名 (男子112名，女子122名)，3年生が292名 (男子139名，女子153名) であった。

調査の時期：2009年9月上旬

実施方法：学校側への調査協力への理解と承諾を得た上で，各担任教師の教示を加えた質問紙法を各学級にて実施した。

質問紙の構成：フェイスシート(年齢・学年・性別)と，以下に示す4部構成である。

愛着スタイルに関する質問項目

関係尺度 (Bartholomew & Horowitz, 1991；加藤訳, 1998 以下RQ) を用いた。各愛着スタイル名は記載せずに，その特徴だけを記述した文章を読ませ，それぞれについて，どの程度自分に当てはまるのかを7件法で評定させた。そのうえで，4つの愛着スタイルの中から，自分に最も当てはまると思うスタイルを1つ強制選択させ，これをその人の愛着スタイルとした。

心理的距離に関する質問項目

最も親しいと思われる同性友人との心理的距離を測定した。金子 (1989) の心理的距離尺度10項目を使用し，5件法で評定させた。ただし，質問項目において相手を指す言葉をすべて「その人」に変更し，その友人についての回答を求めた。

対人的疎外感に関する質問項目

宮下・小林 (1981) の研究を参考に杉浦 (2000) が作成した対人的疎外感尺度21項目をランダムに並び替えて使用し，5件法で評定させた。

幼少期の親への愛着に関する質問項目

佐藤 (1993) の回想された親への愛着に関する尺度18項目を使用し，5件法で評定させた。調査協力者が中学生であることを考慮し，五十

嵐•萩原 (2004) の研究を参考に，一部の項目表現を変更した。また，回想時期を幼少期とするため，教示文を「８歳 (小学校２年生) くらいまで」と変更した。

結果と考察

有効回答者数は，476名であった。内訳は，２年生が218名 (男子103名，女子115名)，３年生が258名 (男子115名，女子143名) であった。以下，調査結果の分析は，Windows XP上で，R 2.8.0を用いて行った。

1. 各愛着スタイルへの分類

Table 1　各愛着スタイルごとの最終的な人数

		安定型	拒絶型	とらわれ型	恐れ型	合計
2年生 (218名)	男子	39 (37.9%)	19 (18.4%)	31 (30.1%)	14 (13.6%)	103 (100.0%)
	女子	34 (29.6%)	9 (7.8%)	53 (46.1%)	19 (16.5%)	115 (100.0%)
3年生 (258名)	男子	46 (40.0%)	18 (15.7%)	39 (33.9%)	12 (10.4%)	115 (100.0%)
	女子	36 (25.2%)	19 (13.3%)	70 (49.0%)	26 (12.6%)	143 (100.0%)
男子		85 (39.0%)	37 (17.0%)	70 (32.1%)	26 (11.9%)	218 (100.0%)
女子		70 (27.1%)	28 (10.9%)	123 (47.7%)	37 (14.3%)	258 (100.0%)
全体		155 (32.6%)	65 (13.7%)	193 (40.5%)	63 (13.2%)	476 (100.0%)

上段：人数（名）、下段：割合（%）

本研究では，安定型が155名 (32.6%)，拒絶型が65名 (13.7%)，とらわれ型が193名 (40.5%)，恐れ型が63名 (13.2%)であった (Table 1)。男女別に見ると，男子では，安定型が85名 (39.0%)，拒絶型が37名 (17.0%)，とらわれ型が70名 (32.1%)，恐れ型が26名 (11.9%)であった。女子では，安定型が70名 (27.1%)，拒絶型が28名 (10.9%)，とらわれ型が123名 (47.7%)，恐れ型が37名 (14.3%) であった。加藤 (1998) の日本人の大学生を対象とした研究においても，安定型が19%，拒絶型が7%，とらわれ型が47%，恐れ型が29%であり，とらわれ型の割合が愛着スタイルの中で最も多く，この点については，中学生を対象とした本研究においても同様の結果であった。しかし，加藤 (1998) の研究では，とらわれ型に次いで割合が高かったのが恐れ型であったのに対し，本研究においては安定型の割合が高かった。

2. 尺度構成

心理的距離尺度：全10項目について最尤法 (バリマックス回転) による因子分析を行った結果，金子 (1989) 同様，１因子構造が妥当と判断した。心理的距離が遠いほど得点が高くなるように配点し，各項目の得点の合計を尺度得点とした。その際，項目内容とα係数の観点から，「その人に対して反発したくなる」を削除し，９項目構成の尺度とした。α係数は，0.88であった。

対人的疎外感尺度の尺度構成：全21項目について最尤法 (バリマックス回転) による因子分析を行った結果，杉浦 (2000) 同様，１因子構造が妥当と判断した。対人的疎外感が強いほど得点が高くなるように配点し，各項目の得点の合計を対人的疎外感の得点とした。α係数は，0.92であった。

回想された親への愛着に関する尺度の尺度構成：全18項目について最尤法 (バリマックス回転) による因子分析を行った (Table 2)。固有値の変化および因子の解釈可能性から，佐藤 (1993) 同様，３因子構造が妥当と判断した。項目の選択は，因子負荷の絶対値が.35以上であることを基準に行い，複数の因子にその基準以上の負荷を持つ項目については，項目の内容やα係数の上昇を考慮しながら３項目を削除した。そして，因子負荷量の高い項目からなる下位尺度を構成し，α係数をそれぞれ算出した。第１因子は，親との関係に対する不信感を示していると考えられる８項目から構成されたため，「不信」と命名した。α係数は，0.85であった。第２因子は，親から離れることに対する不安を示していると考えられる4項目から構成されたため，「分離不安」と命名した。α係数は，0.70であった。第３因子は，親に安心して頼る態度を示していると考えられる３項目から構成されたため，「安心」と命名した。α係数は，0.74であった。

また，幼少期の親との関係が良好なほど得点が高くなるように，不信の得点を逆転させた後，安心の得点と合算して，幼少期の愛着の得点とした。分離不安については，その程度によって親との関係が良好であるか否かの判断が難しい

Table 2　回想された親への愛着に関する尺度の因子分析結果（最尤法、バリマックス回転）

質問項目	Factor1	Factor2	Factor3	共通性
Ⅰ. 不信				
414 親は、私の本当の気持ちをわかっていなかった	0.73	-0.04	-0.20	0.57
411 親からあまり好かれていないように感じることがあった	0.70	0.04	-0.19	0.53
408 親は、私のちょっとしたことで、よく気分を害した	0.66	0.03	-0.07	0.44
418 親のことを、嫌いだと思うことがあった	0.63	-0.13	-0.05	0.42
403 今の親とは違う親が欲しいと思うことがあった	0.62	-0.02	-0.12	0.40
416 親に捨てられてしまうかもしれないと思うことがあった	0.61	0.17	-0.18	0.44
412 何か困ったことがあっても、親に頼ることはできなかった	0.58	-0.04	-0.29	0.43
407 親に何か相談したり、親の意見を聞いたりすることは少なかった	0.43	0.01	-0.32	0.29
Ⅱ. 分離不安				
410 親から離れてひとりで行動することはこわかった	-0.07	0.71	0.13	0.53
405 親がそばについていてくれないと不安だった	-0.06	0.69	0.26	0.54
413 できれば、親とだけ、いつもいっしょにいたいと思った	-0.01	0.64	0.10	0.42
417 親や家族以外の人とは、一緒にいても落ち着かなかった	0.27	0.39	-0.13	0.24
Ⅲ. 安心				
401 外であったできごとをよく親に話した	-0.13	0.09	0.78	0.63
402 親にはげましてもらうと元気がでた	-0.31	0.26	0.72	0.67
415 心配事や悩みがあるとき、それを親に話した	-0.33	0.25	0.42	0.35
因子寄与	3.45	1.73	1.72	6.89
寄与率	23.00	11.50	45.90	

削除項目
404 親に悩みを話すのは、はずかしく感じた
406 親は私の良い面も悪い面もわかってくれていた
409 親のことが好きだった

ため単独で扱い，下位尺度得点をそのまま分離不安の得点とした。

3. 学年差や性差の検討

愛着スタイル：学年と性別のχ^2乗検定を行った結果，学年間では，愛着スタイルの人数比率に，有意な違いは見られなかった（χ^2=1.80, *df*=3, *n.s.*)。性別間では，愛着スタイルの人数比率に，有意な偏りが見られた（χ^2=15.92, *df*=3, *p*<.01)。残差分析を行ったところ，男子は女子と比べて，安定型が１％の水準で有意に多く，とらわれ型が１％の水準で有意に少なかった。

愛着スタイルにおける自己観・他者観得点：Griffin & Bartholomew (1994) に従い，各スタイルへの自己評定値から，自己観得点 ((安定型+拒絶型) － (とらわれ型+恐れ型)) と他者観得点 ((安定型+とらわれ型)－(拒絶型+恐れ型)) を算出した (Table 3, 4)。そして，それぞれに対して，学年と性別の２要因分散分析を行った。

自己観得点では，性別の主効果のみ有意であり，0.1%の水準で，男子のほうが女子よりも自己観得点が有意に高かった (*F*(1,472)=18.82, *p*<.001)。

Table 3　自己観得点の平均値と標準偏差

	性別	M	SD	n
2年生（218名）	男子	0.4	3.84	103
	女子	-0.8	3.76	115
3年生（258名）	男子	0.5	2.63	115
	女子	-0.9	2.65	143

Table 4　他者観得点の平均値と標準偏差

	性別	M	SD	n
2年生（218名）	男子	1.8	3.32	103
	女子	2.3	3.13	115
3年生（258名）	男子	1.4	3.39	115
	女子	1.5	2.90	143

他者観得点では，学年の主効果のみ有意であり，５％の水準で２年生のほうが３年生よりも他者観得点が有意に高かった (*F*(1,472)=4.05, *p*<.05)。

心理的距離：学年と性別による心理的距離を算出した (Table 5)。２要因分散分析を行った結果，学年の主効果は有意であり，５％の水準で，３年生のほうが２年生よりも心理的距離が有意に遠かった(*F*(1,472)=4.90, *p*<.05)。性別の主効果においても有意であり，0.1%の水準で，男子のほうが女子よりも心理的距離が有意に遠かった (*F*(1,472)=35.56, *p*<.001)。

Table 5　心理的距離の平均値と標準偏差

	性別	M	SD	n
2年生（218名）	男子	16.9	5.51	103
	女子	14.5	5.26	115
3年生（258名）	男子	18.9	6.21	115
	女子	15.0	6.18	143

対人的疎外感：学年と性別による対人的疎外感を算出した (Table 6)。２要因分散分析を行った結果，学年の主効果のみ有意であり，５％の

水準で，３年生のほうが２年生より対人的疎外感が有意に高かった（$F(1,472)=6.00$，$p<.05$）。

Table 6　対人的疎外感の平均値と標準偏差

	性別	M	SD	n
2年生（218名）	男子	45.8	14.86	103
	女子	44.0	14.74	115
3年生（258名）	男子	48.9	13.77	115
	女子	47.3	13.51	143

回想された親への愛着：３つの下位尺度（不信，分離不安，安心）について，それぞれ学年と性別による得点を算出した。(Table 7，8，9)，

Table 7　不信の平均値と標準偏差

	性別	M	SD	n
2年生（218名）	男子	17.8	6.43	103
	女子	16.7	6.92	115
3年生（258名）	男子	20.4	6.31	115
	女子	19.8	6.08	143

Table 8　分離不安の平均値と標準偏差

	性別	M	SD	n
2年生（218名）	男子	9.0	3.37	103
	女子	9.6	3.42	115
3年生（258名）	男子	8.3	2.92	115
	女子	9.8	2.99	143

Table 9　安心の平均値と標準偏差

	性別	M	SD	n
2年生（218名）	男子	10.0	3.07	103
	女子	10.9	2.94	115
3年生（258名）	男子	8.5	2.95	115
	女子	10.5	2.66	143

それぞれに対して２要因分散分析を行った結果は下記のとおりである。

不信では，学年の主効果のみ有意であり，0.1%の水準で，３年生のほうが２年生よりも不信の得点が有意に高かった（$F(1,472)=23.94$，$p<.001$）。

分離不安では，性別の主効果のみ有意であり，0.1%の水準で，女子のほうが男子よりも分離不安の得点が有意に高かった（$F(1,472)=13.51$，$p<.001$）。

安心では，５%の水準で，学年と性別による交互作用が見られた（$F(1,472)=4.80$，$p<.05$）。そこで，学年の単純主効果を検討するため，男女別にデータを分類し，１要因分散分析を行った。その結果，男子においてのみ，0.1%の水準で，２年生のほうが３年生よりも有意に安心の得点が高かった（$F(1,216)=14.94$，$p<.001$）。次に，性別の単純主効果を検討するため，学年別にデータを分類し，１要因分散分析を行った。その結果，２年生では，５%の水準で女子のほうが，男子よりも有意に安心の得点が高かった（$F(1,216)=4.98$，$p<.05$）。3年生では，0.1%の水準で，女子のほうが男子よりも有意に安心の得点が高かった（$F(1,256)=35.34$，$p<.001$）。

これらの結果から，３年生では２年生よりも他者との間の心理的距離が遠く，対人的疎外感が強いことが明らかになった。これらの学年差に関しては，３年生が受験を控えた時期にあるため，他者との間に距離を置きやすく，毎日の生活に息苦しさを感じている影響の可能性があるだろう。また，進路を決めるという大事な時期において，自我実現に向けて，内的体験を追及（石隈，1998，p182）し，２年生の時のような理想化された他者ではなく，現実の自己や他者をより深く見つめるようになった結果であるとも考えられる。このことは，他者からの評価，態度に敏感さとつながり，この敏感さによってこの時期の不安定な自己像が揺り動かされることで，他者への意識がネガティブに変化していくため，対人的疎外感が強くなったのだとも考えられよう。

性差に関する結果からは，男子では，女子と比べて他者に距離を置き，他者と親密な関係を築くことよりも，自己の存在を重視し，他人に依存しない自己価値を高く持っていると考えられる。一方，女子では，幼少期の親との関わりが，男子と比べて依存的であると回想する一方で，その関係に安心感を抱いており，他者と密な関係を持つことと安心感を持つことが関連していることが示唆された。

回想された愛着である不信と安心において学年差が認められたことに関しては，仮に２年生と３年生とで過去の幼少期の親子関係および愛着に大きな違いがなかったことを想定すると，学年による他者との関係の差に合わせて，幼少期の親との関係についての回想が変化することが示唆された。

以上の結果をふまえ，以降の分析は，２年生男子，２年生女子，３年生男子，３年生女子の４群に分け，それぞれ分析を行った。

４．愛着スタイルと心理的距離が対人的疎外感に与える影響：愛着スタイルと心理的距離の両者が対人的疎外感に与える影響を検討するため，心理的距離を中央値によって２群に分類し(Table 10, 11)，２要因分散分析を行った (Table 12)。

Table 10　各群における心理的距離高群、低群の分類

		心理的距離		
		高群	低群	合計
2年生（218名）	男子	50名(17点以上)	53名(17点未満)	103名
	女子	56名(14点以上)	59名(14点未満)	115名
3年生（258名）	男子	39名(20点以上)	76名(20点未満)	115名
	女子	64名(14点以上)	79名(14点未満)	143名

Table 11　各愛着スタイルと心理的距離における対人的疎外感の平均値と標準偏差

	心理的距離		2年男子	2年女子	3年男子	3年女子
安定型	高群	mean	46.2	42.4	46.9	52.4
		(sd)	(12.21)	(13.59)	(10.87)	(10.02)
		n	13	10	13	12
	低群	mean	35.5	34.2	39.3	37.2
		(sd)	(10.44)	(7.30)	(10.41)	(10.91)
		n	26	24	33	24
	−−	mean	39.1	36.6	41.8	42.3
		(sd)	(12.03)	(10.10)	(11.04)	(12.76)
		n	39	34	46	36
拒絶型	高群	mean	48.4	45.7	55.3	50.8
		(sd)	(12.68)	(21.13)	(8.80)	(10.28)
		n	15	3	7	9
	低群	mean	52.3	51.2	54.2	39.5
		(sd)	(23.21)	(21.09)	(20.47)	(10.44)
		n	4	6	11	10
	−−	mean	49.2	49.3	54.7	44.8
		(sd)	(14.75)	(19.93)	(15.93)	(11.62)
		n	19	9	18	19
とらわれ型	高群	mean	51.0	48.7	58.7	51.8
		(sd)	(10.31)	(14.17)	(10.77)	(13.39)
		n	15	32	14	33
	低群	mean	45.8	41.2	49.8	45.4
		(sd)	(17.34)	(12.22)	(12.85)	(11.21)
		n	16	21	25	37
	−−	mean	48.3	45.8	53.5	48.4
		(sd)	(14.39)	(13.81)	(12.68)	(12.62)
		n	31	53	39	70
恐れ型	高群	mean	61.3	56.1	53.3	64.3
		(sd)	(10.69)	(15.86)	(10.60)	(10.49)
		n	7	11	5	10
	低群	mean	46.7	41.1	51.2	44.6
		(sd)	(19.85)	(16.20)	(15.83)	(15.87)
		n	7	8	7	8
	−−	mean	54.0	49.8	52.3	55.6
		(sd)	(17.08)	(17.30)	(12.89)	(16.22)
		n	14	19	12	18
−−	高群	mean	50.4	48.9	53.4	53.7
		(sd)	(12.24)	(14.97)	(11.29)	(12.61)
		n	50	56	39	64
−−	低群	mean	41.4	39.4	45.9	42.1
		(sd)	(15.87)	(13.04)	(14.48)	(11.93)
		n	53	59	76	79

Table 12　対人的疎外感における愛着スタイルと心理的距離の２要因分散分析

要因	2年生男子	2年生女子	3年生男子	3年生女子
愛着スタイル	4.15** (3.4>1)	3.67* (3.4>1)	7.43*** (2.3>1)	3.84* (4>1)
心理的距離	6.96** (高群>低群)	9.26** (高群>低群)	7.07** (高群>低群)	29.46*** (高群>低群)
愛着スタイル × 心理的距離	1.29	1.08	0.55	2.02

上段:F値、下段:多重比較
1. 安定型、2. 拒絶型、3. とらわれ型、4. 恐れ型
***p<.001, **p<.01, *p<.05

２年生男子では，愛着スタイルの主効果は，１％の水準で有意であった (F(3,95)=4.15, p<.01)。TukeyのHSD法 (5 %水準) による多重比較を行ったところ，とらわれ型と恐れ型が，それぞれ安定型よりも有意に対人的疎外感の得点が高かった。また心理的距離が遠い者のほうが，心理的距離が近い者よりも１％の水準で有意に対人的疎外感の得点が高かった (F(1,95)=6.96, p<.01)。

２年生女子においても，愛着スタイルの主効果は，５％の水準で有意であった (F(3,107)=3.67, p<.05)。TukeyのHSD法 (5 %水準) による多重比較を行ったところ，とらわれ型と恐れ型が，それぞれ安定型よりも有意に対人的疎外感の得点が高かった。また心理的距離が遠い者のほうが，心理的距離が近い者よりも１％の水準で有意に対人的疎外感の得点が高かった (F(1,107) =9.26, p<.01)。

３年生男子においても，愛着スタイルの主効果は，0.1%の水準で有意であった (F(3,107)=7.43, p<.001)。TukeyのHSD法 (5 %水準) による多重比較を行ったところ，拒絶型ととらわれ型が，それぞれ安定型よりも有意に対人的疎外感の得点が高かった。また心理的距離が遠い者のほうが，心理的距離が近い者よりも1%の水準で有意に対人的疎外感の得点が高かった (F(1,107)=7.07, p<.01)。

３年生女子においても，愛着スタイルの主効果は，５％の水準で有意であった (F(3,135)=3.84, p<.05)。TukeyのHSD法 (5 %水準) による多重比較を行ったところ，恐れ型のほうが安定型よりも，有意に対人的疎外感の得点が高かった。また心理的距離が遠い者のほうが，心理的距離が近い者よりも0.1%の水準で有意に対人的

疎外感の得点が高かった(F(1,135)=29.46, p<.001)。

問題で述べたように，自己観，他者観がともにポジティブであり，他者からの受容を確信し，自己価値を自身によって見出すことの出来る安定型は4群すべてにおいて対人的疎外感は低かった。しかしながら，とらわれ型，拒絶型，恐れ型の3つの愛着スタイル間においては，有意な差が見られなかった。この結果の解釈としては，対人的疎外感に与える要因としての自己観と他者観には差がなく，どちらか一方がネガティブであることが対人的疎外感に影響を与えていると考えられる。

ただし，２年生に関しては，男女ともに自己観がネガティブである，とらわれ型と恐れ型が，安定型よりも対人的疎外感が強かった。先の結果より，２年生が３年生と比べて他者との関係を回避せず，他者は助けを求めた際に，近づき得ることができ，応答してくれると意識している。保坂 (1998, p107) によると，思春期にある彼らは，親から自立しようとすると同時にその不安から依存(甘え)が再熱するという両価性を持っているとされている。また石隈 (1998, p182) は，11〜14歳の時期の友人関係について，同性の仲間との親密で理想化された友情の高まりの段階にあると述べている。これらをふまえると，2年生の彼らは，他者との親密な関係を重視しつつ，理想化された関係の中で自己像を探り，自己の価値を築いていくのだと考えられよう。しかしながら，自己像が不安定である以上，理想化された関係の中で起こる多くのつまずきを自己に帰属し，自己は周りの他者に助けを与えられ難い人間，価値のない人間であると認知する自己観の持ち主は，他者との間に距離感を感じ，対人的疎外感が強くなると考えられる。

それに対して，３年生では，先に考察したように，より現実を直視しながらの対人関係，対人的出来事に沿って，他者や自己に関する確信をつくりあげつつあると考えられる。そのため，自己観，他者観のそれぞれが重要であり，両者が対人的疎外感に影響を与えていると考えられる。よって，３年生では，少なくともどちらか一方がネガティブである愛着スタイルにおいて，自己観と他者観がともにポジティブな安定型愛着スタイルよりも，対人的疎外感が高かったのだと考えられる。

以上のことから，学年の進行によって，愛着スタイルの自己観や他者観が変化していく可能性が示唆された。

次に，とらわれ型において交互作用が認められず，心理的距離の大きさが，対人的疎外感に差をもたらさなかったことについて検討する。とらわれ型の特徴のひとつに「対人関係について議論する際には一貫性がなく，情動を大げさに表出する」(加藤, 1998) がある。この点，とらわれ型はこうした情動の表出を他者が受容した場合に，幸福感を得られるのかもしれない。そのため，とらわれ型の人にとっては，他者との心理的距離がどの程度であるかは重要ではなく，心理的距離が遠くとも，近くとも，それぞれの状態に合わせて希望を抱き，この希望が少しでも叶うことがないと，そのことに敏感に反応し，幸福感の低下や対人的疎外感に結びつくのかもしれない。

５．回想による幼少期の親への愛着と，愛着スタイルや友人との心理的距離が，対人的疎外感に与える影響：各群において，愛着スタイルにおける自己観と他者観，友人との心理的距離，分離不安と幼少期の愛着を説明変数に含め，対人的疎外感を目的変数とした重回帰分析を行った (Table 13)。

２年生男子では，このモデルは有意であった(R^2= .32, F(5,97)=9.31, p<.001)。有意な標準偏回帰係数を見ると，自己観は弱い負の影響を与えていた(β= -.23, p<.01)。他者観は弱い負の影響を与えていた(β= -.21, p<.05)。分離不安は弱い正の影響を与えていた(β= .18, p<.05)。幼少期の愛着は負の影響を与えていた(β= -.31, p<.001)。

２年生女子では，このモデルは有意であった(R^2= .51, F(5,109)=23.05, p<.001)。有意な標準偏回帰係数を見ると，他者観は弱い負の影響を与えていた (β= -.24, p<.001)。心理的距離は弱い正の影響を与えていた (β= .32, p<.001)。分離不安は弱い正の影響を与えていた (β= .20, p<.01)。幼少期の愛着は負の影響を与えていた (β= -.36, p<.001)。

3年生男子では，このモデルは有意であった(R^2= .49, F(5,109)=21.16, p<.001)。有意な標準偏回帰係数を見ると，自己観は弱い負の影響を与えていた(β= -.24, p<.001)。他者観は弱い負の影響を与えていた(β= -.17, p<.05)。心理的距離は弱い正の影響を与えていた(β= .14, p<.05)。分離不安は弱い正の影響を与えていた(β= .14, p<.001)。幼少期の愛着は比較的強い負の影響を与えていた(β= -.47, p<.001)。

3年生女子では，このモデルは有意であった(R^2= .43, F(5,137)=20.67, p<.001)。有意な標準偏回帰係数を見ると，自己観は弱い負の影響を与えていた(β= -.19, p<.01)。他者観は弱い負の影響を与えていた(β= -.21, p<.01)。心理的距離は弱い正の影響を与えていた(β= .28, p<.001)。分離不安は弱い正の影響を与えていた(β= .17, p<.01)。幼少期の愛着は比較的強い負の影響を与えていた(β= -.41, p<.001)。

Table 13 各群における対人的疎外感を目的変数とした重回帰分析の結果(β値)

	2年生		3年生	
	男子	女子	男子	女子
自己観	-.23**	-.13	-.24***	-.19**
他者観	-.21*	-.24***	-.17*	-.21**
心理的距離	.16	.32***	.14*	.28***
分離不安	.18*	.20**	.14***	.17*
幼少期の愛着	-.31***	-.36***	-.47***	-.41***
R^2	.32***	.51***	.49***	.43***

***p<.001, **p<.01, *p<.05

すなわち，すべての群において，愛着スタイル，友人との心理的距離，回想された親への愛着が，それぞれ対人的疎外感に影響を与えているものの，とりわけ幼少期の愛着が与える影響は大きかった。そして，男子では女子に比べて自己観が，女子では男子に比べて現在の友人との心理的距離が，回想による幼少期の愛着に次いで強い影響を与えていた。

これまで述べてきたように，思春期では愛着対象を，親から友人をはじめとする親以外の他者に移っていくが，すぐにその関係が安定するわけではない。その過程においては，親との関係を手がかりに，他者，とりわけ身近な友人に対する意識や自己像を形成する。そのため，幼少期に良好な親子関係を築けなかった場合には，それを現在の対人関係にも当てはめ，本当の自分は誰にも理解されないと感じやすく，愛着スタイルの自己観や他者観，友人との心理的距離に比べて，対人的疎外感に最も強くつながるのだと考えられた。ただし本研究では回想法を用いているため，この点に関してはさらに検証する必要があるだろう。

また，男子は，先述した通り，女子に比べ，独立的であり，自己を重視し，高い自己観を持っていると考えられた。そのため，自己を支えてきた高い自己観が崩れると，自分自身で自己に価値を与えることが出来なくなり，他者との間の距離感を実感し，他者との関わりの中で気詰まりを感じ，対人的疎外感へとつながるのだと考えられた。

また独立的である男子では，問題が生じたとしても，自分自身で処理することが考えられる。そのため，他者との関係が密であるかという友人との心理的距離や，他者に助けや保護を求めた際に近づき得るか，応答してくれるかという他者観は，自己観と比べてその重要性が低いと考えられる。そうしたことから，男子では，友人との心理的距離と他者観が対人的疎外感へ与える影響は弱く，対人的疎外感につながりにくいのだと考えられた。

一方，丹羽 (2002)，Coleman (1980, 岡田 (1992) 引用による) によると，女子は親密な関係を形成，維持しようとする傾向にあるとともに，相手の評価を気にして対人不安を感じやすい。そうしたことから，思春期の時期女子においては特に，他者は助けを求めたときに近づき得るか，そして応答してくれるかという他者観よりも，現実に他者と密な関係を築くことが重要な意味を持つと考えられる。そのため，女子は友人とどれほど分かり合えているかという親密さ，すなわち心理的距離の程度が，他者観以上に対人的疎外感に強く影響を与えるのだと考えられよう。

引用文献

Bartholomew, K., & Horowitz, L.M. 1991 Attachment style among young adults: A test of a four category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, Pp.226-

244

Bowlby, J. 1973 *Attachment and loss: Vol. 2. Separation: Anxiety and anger*. New York: Basic Books. (黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子 (訳) 1977 母子関係の理論Ⅱ: 分離不安 岩崎学術出版社)

Collins, L.N., Guichard, C.A., Ford, B.W., & Feeney, C.B. 2004 アタッチメント作業モデル ―新たな展開と課題― (７章) W.スティーヴン,ロールズ・ジェフリー,A,シンプソン (編) 遠藤利彦・谷口弘一・金政祐司・串崎真志 (監訳) 2008 成人のアタッチメント ―理論・研究・臨床― (株) 北大書房 Pp.184-219
(Edited by Rholes, W.S., & Simpson, A.J. 2004 *Adult Attachment Theory, Research, and Clinical Implications:* The Guilford Press A Division of Guilford Publications)

遠藤利彦 1998 乳幼児期の発達 (第2章) 下山晴彦 (編) 教育心理学Ⅱ 発達と臨床援助の心理学 財団法人東京出版会 Pp.43-72

Griffin, D.W., & Bartholomew, K. 1994 The metaphysics of measurement: The case of adult attachment. In Bartholomew, K., & Parlman, D. (Eds.), *Advance in personal relationships, 5, Attachment process in adulthood.* London: Jessica Kingsley Publishers Ltd. Pp.17-52

保坂亨 1998 児童期・思春期の発達 (第4章) 下山晴彦 (編) 教育心理学Ⅱ 発達と臨床援助の心理学 財団法人東京出版会　Pp.103-126

五十嵐哲也・萩原久子 2004 中学生の不登校傾向と幼少期の父親および母親への愛着との関連 教育心理学研究, 第52巻, 第３号, Pp.264-276

石隈利紀 1998 学校臨床 (第６章) 下山晴彦 (編) 教育心理学Ⅱ　発達と臨床援助の心理学 財団法人東京出版会 Pp.155-182

神谷栄治 1997 思春期: 前期―中学生 (５章) 馬場禮子・永井撤 (共編) ライフサイクルの臨床心理学 培風館 Pp.75-94

金子俊子 1989 青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究 青年心理学研究, 第３号, Pp.10-19

粕谷貴志・菅原正和 2001 中学生の内的作業モデルと学校適応との関連 岩手大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要, 第11巻, Pp.137-145

加藤和生 1998 Bartholomewらの４分類愛着スタイル尺度 (RQ) の日本語版の作成 認知・体験過程研究, 7, Pp.41-50

宮下一博・小林利宜 1981 青年期における「疎外感」の発達と適応との関係 教育心理学研究, 第29巻, 第４号, Pp.297-305

中尾達馬・加藤和生 2003 成人愛着スタイル尺度間にはどのような関連があるのだろうか？ ―４カテゴリー(強制選択式・多項目式)と３カテゴリー (多項目式) との対応性― 九州大学心理学研究, 第４巻, Pp.57-66

丹羽智美 2002 青年期における親への愛着が友人関係に及ぼす影響 －環境移行期に着目して－ 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 心理発達科学, 第49巻, Pp.135-143

岡田努 1992 友人とかかわる 松井豊 (編) 対人心理学の最前線　サイエンス社 Pp.22-29

Pietromonaco, R.P., Greenwood, D., & Barrett, F.L. 2004 成人の親密な関係における葛藤 ―アタッチメントの視点から― (９章) W.スティーヴン,ロールズ・ジェフリー,A,シンプソン (編) 遠藤利彦・谷口弘一・金政祐司・串崎真志 (監訳) 2008 成人のアタッチメント ―理論・研究・臨床― (株) 北大書房 Pp.238-267
(Edited by Rholes, W.S., & Simpson, A.J. 2004 *Adult Attachment Theory, Research, and Clinical Implications:* The Guilford Press A Division of Guilford Publications)

酒井厚 2001 青年期の愛着関係と就学前の母子関係 ―内的作業モデル尺度作成の試み― 性格心理学研究, 第９巻, 第２号, Pp.59-70

坂本安・高橋靖恵 2006 疎外感と友人関係に関する研究 ―心理的距離の視点から― 日本青年心理学会大会発表論文集, 第14号, Pp.48-49

佐藤朗子 1993 青年の対人的構えと親および親以外の対象への愛着の関連 名古屋大學教育學部紀要. 教育心理学科, 第40巻, Pp.215-226

杉浦健 2000 ２つの親和動機と疎外感との関係 ―その発達的変化― 教育心理学研究, 第48巻, 第３号, Pp.352-360

詫摩武俊・戸田弘二 1988 愛着理論からみた青年の対人態度　―成人版愛着スタイル尺度作成の試み― 東京都立大学人文学報, 196, Pp.1-16